

二重性の複合としての＜個性＞

——哲学的・社会学的考察——

● 池 田 光 義

〔1〕個性とは

「レディガガは個性的だ」というとき、個性はどのようなものとして考えられているのだろうか。個性というときにイメージされる一般的な特徴にはどのようなものがあるのだろうか。「他の皆と違う」というのが常套の解答パターンの一つであろう。これは個性の本質規定を「他者との違い」に求める考え方であり、＜個性＝差異性＞とする立場である。現代社会ではもっとも流通している個性観念といってよいであろう。しかし、実際の社会生活では、単に「他者と違う」だけでは通常、個性的とは言わない。「他者と違う」から個性的だと間主観的に判断・評価されるためには、違いの比較対象にされる「他者」は「平凡で平均的な人間」でなければならないのである。つまり、「Xは個性的だ」といわれるとき、「Xは平凡で平均的な人物ではない」ということが含意されているのだ。

結局、個性とは、その人物に備わっている性質、内在属性そのものというよりも、他人との関係の中で成立するものなのである。それは＜普通、標準、平均＝凡庸、平凡、通俗、並み＝陳腐、退屈、つまらない、どうしてもよい等々＞に対する＜平均からの偏倚・距離、平均を超越、平均＝平凡の中に「まみれていない」「埋もれていない」、単なるワン・オブ・ゼムではない＞という一般的他者との対比関係における対極の否定として成り立っているのである。個性とは他者とのある種の否定的な関係、つまりは端的に他者との関係性であり他者の否定性なのである。あるいは（古風に言えば）他者との否定関係の反照規定なのである。個性とはこのように「性質それ自体としての規定ではなく、対比関係としての規定だ」ということになるが、個性を成り立たせているもうひとつの対比関係に触れてみよう。それは＜多数・大量・大衆、反復・再生・再現の可能性＞に対する＜少数・稀少、反復・再生産の不可能性＞という対比である。さらに、ある人物が個性的と感じられるには、この稀少性云々といういわば量的な性質が＜独自性、固有性、独創性、唯一性＞という質的な装いを帯びて感じられることが必要である。「ジ・オンリー・ワン」といえば、それ自体は数量規定でありながら質的な響きと雰囲気を帯びる。

しかし、このように個性の本質が関係規定でありながら、対比関係という基盤あるいは背景そのものは一般意識からフェードアウトして、個性がその存在の内在性質そのものとして感じられなくてはならない。単に量的なものであるにもかかわらず質的な色合いを帯び、対比関係で成り立っているはずなのにその関係が背後に退き固有の性質と感じられること、＜量→質＞、＜関係規定→自立した固有性質それ自体＞、無自覚的に進行するこの「転化・自立化」すなわちある種の＜実体化＞にこそ、個性の秘密が潜んでいる。

巷間の個性理解に頻出する「目立つ」という特徴づけも、実は、対比関係で成り立っている。＜目立たない、関心を引かない、顧みられない対象＞に対する＜目立つ、際立つ、注目・注視・関心の対象＝賞賛・羨望・是認・感嘆の対象＞がそれである。アンチ○○、カウンター○○云々としての個性といのも、いわばこの枠組みのパラサイトである。たとえば「反流行」の追及も、非常に目立ち多くの人々の注目を集める流行ファッションに意識的に対抗するファッションに乗

っかることでいっそう目立ち注目されるのを狙ったものだからだ。流行への便乗である。流行が対比関係の一次寄生なら、反流行は二次寄生ということになる。

さらに大切なことは、「みんなと違う」「すごく目立つ」だけではやはり個性的とは言わないという点である。つまり、平均から大きくはずれ、ごく稀にしか見られず、多くの人の注目を引くものでも、否定的な価値しか認められない性質や存在、「特に意味のない」「瑣末な」「どうってことない」といった消極的な性質は、「個性的」とは呼ばない。「くだらん」「つまんない」「なにあれ、ダサイ」「格好悪い」「下品」、いや場合によっては「いやらしい」「気持ち悪い」と唾棄されるだけかもしれない。ニャン太が、モニヤカン頭にサングラスで登場すれば、それが試みようと思えば誰にでもできるような規格化された型通りの格好であっても、「カッコいい」「チョー個性的」と騒がれるかもしれない。しかし、よれよれシワシワの毛並みで鼻水垂らして歩けば、昨今では滅多にはお目にかかれないほどの際立った佇まいであるにもかかわらず、「個性的だ」と感嘆され称賛されることはない。せいぜいニャ〜子たちから「キモ」「ダサ」「不潔」とブーイングを浴びるのが落ちである。要するに、個性的と見なされる対象は、基本的に、「すごい」「やばい」「カッコいい」あるいは「見事だね」「華麗で秀逸」など積極的でプラスの意味や価値をもつものに限られるのである。

ところで、社会の多くの人々がある個人やグループの特性を集合的に＜個性＞と呼ぶとき、そのこと自体にどのような効果があるのだろうか。例えば「障害もひとつの個性である」「個性に応じた教育」「あなたの個性を際立たせるメイク」という常套句を例に取りあげてみよう。ここでは障害を個性と見なすことの含意や是非はあえて問わない。個性に応じた教育というフレーズの陰に潜む欺瞞や隠蔽も問題にしない。そのかんばせを字句通りに際立たせれば異化効果満点のますますシュールな顔面が彫琢されるのではという疑念も押さえる。指摘したいことはただ一つ、福祉、教育、ファッションといった分野を全く異にするこうしたキャッチフレーズも、個性観念が漂わせるプラスのイメージをたっぷりと利用しているという点では共通しているということである。少なくとも表面上は社会的有用性を動機にしているかのように見えるこうした個性言説からも、半ば無意識的な虚飾と糊塗の意図が垣間見えるのだ。

【2】逆説としての個性

「十人十色、一人一人、みな個性的」などとのたまいながら「あの人やっぱりB型なんだって」「でしよう、典型的なBよ」と叫んで特定個人を画然と区別された血液型に、それも何種類もある血液型分類の可能性の中からあえてABO血液型の一つに分類したかと思うと、その一分後には十二「星座」タイプの一つに振り分けて平然としている輩を頻々に見かける。肝心な点は、個性を語るとき私たちは大なり小なりこうした類型化を行っているということ、しかも類型化していながら当人は十分に個性を問題にしていると思い込んでいることである。面白いことに、「個性の強い人」と呼ばれる人物ほど類型化、様式化、モデル化しやすい傾向にある。かつて「個性派」として一世を風靡した喜劇俳優が茶目っ気たっぷりに自分の「そっくりさんコンテスト」に本人であることを明かさずに参加した。結果はなんと二位だった。そこには、本人自身よりも「本人」に似た他人がいた、本人自身よりも「本人の個性」を備えた（ように一般には見える）他者がいたという逆理がある。「化け猫ニャ〜子のパラドクス」というのがある。「個性を強調する」つもりで「化粧」「メイク」を徹底していくと、みんな似たような無個性な顔になってしまうというパラドックスだ。ある女性週刊誌のキャッチコピーに「流行のメイクで個性を求めて同じ顔」というのがあったが、まことに言い得て妙である。

この場合に言われる個性とは、最終的には(a)特定の一般的性質を量的により強調、強化、誇張、極端化することで得られる効果、あるいは(b)一般的性質の異なった（特殊な）組み合わせによって得られる効果、(c)こうした効果が主流になった場合の、「反○○」・「非○○」という拒絶・反発効果に尽きる。それゆえに、先ほど確認したように、「個性的な人」ほど非常に目立ち、多くの人の注意を引くのである。個性とは、一部のごくわずかな人々の関心ではなく、多数の人間の関心や注意を強くひきつけるような性質でなくてはならない、ということである。ということは、大勢の人に注目されればされるほど、個性的になるということでもある。しかしそれは、他ならぬ個性的であることの内実が「多くの人が共有している、つまりは一般的で標準的、平凡で平均的な価値観や感覚や評価基準にフィットすること」にあるという逆説を意味するのである。

だがこのことは、誰もが容易に個性的になれるということではないだろうか。抽象的可能性としてはそうである。ただ現実には「平凡な普通の」人間は、そこまで徹底して一般的な性質を所有し発達させることはできない。それほど直截に一般的性質の「担い手」「体现者」「サンプル」に徹しきれないのだ。ある点に関して（だけ）あまりにも特異に徹底して一般化してしまうと（そして徹底した一般化は少数の特異点に関してしか実現しないのであり、その意味でそれは一般性への特化である）、生身の具体的な人間は、多くの場合、存在や行為のアンバランスに陥り、その実存に不都合が生じてしまう。少数の一般的な性質の担い手になりきってしまうと、日常生活や人間関係が成り立たなくなるのである。そう考えると、「個性的な人物」とは、そんなことにはお構いなく、一般に共有されている関心や感覚や嗜好に同調し、少数の一般的性質を徹底して体现できる（してしまっている）人間の謂いになる。その意味では、自己一般化の徹底の度合いが半端ではない、「人並み」ではないことがそうした人物の特別で独自なところ、「個性的」なところとも言える。とまれ、個性とは、「何ものにも替えがたい」、「掛け替えのない」はずの存在、独自で固有で唯一無二であるはずの個人、個性的であるはずの存在が、独自性や固有性を捨てて一般的で類型化された性質（特徴）を所有する人、担う人になってしまうこと、そういう所有者、担い手と見なされることなのである。

大勢の人に注目されればされるほど個性的になる、個性的であるためには多くの人に注目されなければならない……このことからすでに、こう言える。個性とは、「他者への／他者からの視線」、「他者への／他者からの評価」のなかで作り出される！ 個性は他者の集合的な注目度に依存したその関数である。そこでは、他者が「個性」を実現する手段になり下がっている反面、「個性」は他者の視線に依存し左右される。個性はこのように他者の手段化と本人の他者依存のうえに成り立つ関係規定なのである。一見、悠然たる「主体」の風合いを呈する「個性の所有者」「個性的存在」も、その実、受動的な「視線の客体」としてのみ辛うじて存続を維持できる儚いパラサイトなのである。

誰にとっても「個性的」と映るためには、特定の性質に注目し「個性的」と感じてしまう「一般的」な評価・感覚の仕方が個性視の前提条件として多くの人に暗黙裡に共有されていなければならない。「個性」は大勢の人々の「一般的」で「没個性的」な様式化された視線の中でしか輝きをみせないのである。別言すれば、個性と見なし解読する平準的、没個性的なコード（一般的な個性解読コード！）を内面化した視線が膨大になればなるほど、あるいは膨大な視線がこのコードを内面化すればするほど、このコードに適合する性質の所有者は個性的にみえることになるのである。個性視の前提条件である個性解読コードの具体的内容はもちろん、個性が問題になる社会・文化圏や集団や階層や地域や世代によって異なるし、社会的時間の推移と共に変化する。そこに、どんな点が誰によって個性と見なされ、どんな人物が誰にとって個性的存在と映るかは、

そうした集団や時間に依存して相対的である理由がある。

個性は非個性に対する関係の中の否定性であり、関係や否定対立項に否定的に依存していることにすでに言及した。これは、個性は絶えず否定し続ける営みのうえに実現していることを意味する。否定の営為が停止する瞬間、個性は消滅する。しかし否定すべき確固たる対象が存在感を薄めたり消滅したりすれば、それに対応する個性もフェードアウトしていく。その外見上の「カッコよさ」「眩さ」「際立ち」にもかかわらず、平凡と通俗、平均と陳腐へのパラサイトなのである。これも、個性に内在する逆説と言えるだろう。——要するに、個性とは逆理そのものなのである。

【3】3人称的個性と1－2人称的個性

見知らぬ不特定多数あるいは少数と特定の目的や制約で一時的、一面的にかかわりあうような関係を＜3人称関係＞と呼んでおこう。さて、前節までに明らかになったのは、一般化・様式化された外面の（＝外部に向けられ他者の目に触れやすい）特徴によって他の大多数から目立ち際立つこと、他の大多数がもたないような社会的評価の高い特徴や能力を示すことが「個性」と見なされているということだった。しかし、これは「個性」のひとつの在り方にすぎないのである。

別種の「個性」がはたらくのは、親子、親しい友人、恋人同士といった＜1－2人称の関係＞、つまり深い／濃い／長い／親しい関係においてである。この＜1－2人称の関係＞では、目立つ／際立つ、あるいは秀でた／優れた性質や特徴や能力を「所有」しているかيناかは二次的なことになる。大切なのは、「このわたし」⇔「このあなた」の「この関係」における唯一無二の「このわたし」ないし「このあなた」の「存在」それ自体なのである。1000匹の雌猫の間に全身をギンギラギンの原色プリントで彩色したイケメンのオス猫が突然現れたとしよう。「チョーカッコいい。ヤバイくらい個性的！」と雌猫たちは狂ったように騒ぐことだろう。しかし、来る日も来る日もそうした「個性的」な猫と顔をつき合わせていたらどうなるか。日常的で親密な付き合いになればなるほど、一般的に（＝世間で）目立つとか、優れているとか、カッコいいといわれている特徴や能力はどうでもよくなり、場合によっては「バカバカしく」感じたり「うっとうしく」さえ思うようになるであろう。結局、普段の関係になれば、イケメン猫もギンギラギンの原色プリントを洗い落として「普通の」毛色にもどすことになるだろう。それでも「こいつ、いいやつだね」とか「ただ一緒にいるだけで安らぐわ」と感じられるのであれば、そこにはしっとりとした掛け替えのない「あわい」が萌えいずるのかもしれない。

ここに＜3人称の関係＞の個性と＜1－2人称関係＞の個性の違いがある。もちろん、各個人はすべて異なる存在である。しかし、＜1－2人称関係＞では他者と「異なるから」個性的なのではない。少なくとも「異なること」そのものに価値があるのではない。「このあなた」Bの存在そのものが「このわたし」Aの存在そのものにとって意味があり貴重なのであり、それこそが「わたし」Aにとっての「あなた」Bの個性なのである。Bの存在も、別の個人C、D……にとっては、また別個の個性となるのである。

あるいは、単に相手にとって自分が例えば兄弟姉妹だから／好きになってしまったから／長年一緒に生きてきたから、相手はこの生身のわたしをわたしとして受け入れているだけなのかもしれない。しかし、自然発生的ないし自然与件的であろうが意志選択的であろうが、問題は特定の個人と特定の個人との間に特定の関係が成立しているか否かである。3人称的個性は（ある範囲内の）誰にとっても個性として現れる。それは同一で一般的な個性である。特定の個人関係に依存し左右されるということはなく、逆にその一般性が高まれば高まるほど個性の度合も強まるの

である。これに対し、1－2人称的個性は、まさに特定の個人間にしか成立しない。この特定の個別関係を離れては存在しない。

3人称的個性と1－2人称的個性との対照は、＜所有としての個性＞と＜存在としての個性＞との対照としても展開できる。3人称的個性は所有の対象としての特定性質・能力・様式である。それは個人の全存在から切り離された、多数の個人に共通し得る一般的・抽象的規定である。その個人も全き存在から抽象的な「個性の所有主体」と化している。これに対し、1－2人称的個性は存在規定、いや存在そのものであり、存在から切り離すことができない。「同じ兄弟姉妹でも、やっぱり一人一人違うのよね」と母親が言う場合でも、その違う性質や特徴は話題に上っている本人の存在や兄弟姉妹関係や母子関係から離れて成立しているわけではない。母親にとっての二人の個性と第三者にとっての二人の個性は質的に異なるのである。まるで第三者的に語っているように母親自身が自己錯認しがちなのも、個性の根拠と基盤たる子供の特定存在、子供に対する特定の関係があまりにも自明であるからである。

注意しておきたいのは、現代社会では「個性」問題に接する際に3人称的個性と1－2人称的個性とが混同されがちであるという点である。そして、例えば親密な1－2人称的友情関係であるはずの友達関係でいわゆる「キャラ」を話題にする傾向が見られるように、1－2人称的個性が問題になっている脈絡で3人称的個性にしか当てはまらないような事柄をもちだし、1－2人称的個性を3人称化してしまう点である。それは存在としての個性を所有としての個性に転化する＜個性の所有化＞とも言える現象である。ところで、ある種の関係として個性を考えるというのが個性論の要諦の一つだが、個性がその関係の間主観的な実体化ないし実体視に基づくという点も同様に重要な視点である。3人称関係での個性の実体化は比較的理解されやすいが、1－2人称関係に見られる実体化の事態を容認することには抵抗を示す向きもある。直接的な存在、具体的で個別的な関係こそ実体化には疎遠であり、実体化を揚棄する足場であるという観念が捨てがたいからである。しかし、直接的な全き存在、具体的で個別的な関係であればあるほど実体化の果たす役割は大きいのである。この次元で個性の三人称化、所有化を招いてしまうのも、ひとつにはこの個性の実体化の力がむしろ萎靡しているからなのだ。

あるいはまた、相互に交換も還元も不可能な関係にある1－2人称的個性と3人称的個性のいずれからかその存在理由を奪ってしまうという傾向、つまり個性をいずれかの種類の個性に縮減してしまうという傾向が見られる点にも注意を促しておきたい。現代的個人にとっては、1－2人称的関係も3人称的関係も不可欠であり、1－2人称的個性と3人称的個性のいずれもが必要なのである。それはしかし、1－2人称的個性と3人称的個性の両方に対して巧みに距離をとり、使い分け、バランスを維持しなければならないことを意味するが、これが容易でないことは縷言を要しない。実際の人間関係の多くが大なり小なり1－2人称的関係の性格と3人称的関係の性格との両方を兼ね備え、その「比率」も千差万別であることを考慮に入れると、二つの個性類型に対するかわり方はさらに複雑な様相を呈することになる。結局、現代の「個性」の問題は少なからず1－2人称的個性と3人称的個性との間の亀裂に由来し、この亀裂はさらに1－2人称的関係と3人称的関係との間の亀裂にその源泉をもつのである。

【4】ヒト・クローン作製問題と個人概念

欧米の「個性」概念は個人を含めた個体の本質規定に関係しているのに対し、現代日本語の「個性」概念は非常に限定的に用いられ、ほとんど「個人差」の謂に限られる。ある概念が輸入文化の一要素として「遅れて」定着したが故に、その原語よりも直截に現代的状況が意味範囲や用語

法に反映する典型例である。以下、「個性」を「個ないし個人とは何か」という問いに対する（社会哲学的次元における）答えとしての「個の本性」の謂とする。さて、個性のもうひとつの二重性の現代的様相をヒト・クローンにまつわる表象を例に検討してみよう。

クローン人間のイメージにまつわる好奇心や当惑、不快感や嫌悪感はどこから来るのだろうか。そもそもそうしたイメージを抱いてしまうことの意味、背景は何なのであろうか。一つの要因として、「個性（個体間差異、個体の独自性・固有性）は最終的にゲノムの差異・独自性にある（還元できる）」という個性に関する「遺伝子中心主義」・「遺伝子決定論」・「遺伝子還元主義」を挙げることができるだろう。この遺伝子主義的個体論の土壤に「クローン技術によって生み出されたクローン個体は遺伝子提供個体の＜複製＞である」という思い込みが培養される。もちろんクローン個体は遺伝子同一個体ですらない。①ミトコンドリア遺伝子は核内（染色体）ゲノムとは独立して卵子を通じて直接受け継がれていく。②4細胞期までの発生初期において、ゲノム・マザー由来の遺伝子情報を選択的に機能させるのは、未受精卵提供マザー由来の卵子の細胞質内の暗号タンパク質である。③遺伝子は、細胞というシステムの中で機能するのであり、この機能は細胞システム全体の構造・機能によって拘束され、細胞内情報（さらには細胞外情報）の影響を受ける、などの理由からだ。また遺伝子型同一個体は当然ながら表現型同一個体でもない。母性効果（母体内生育期間・誕生初期の環境因子）の作用が個性決定因として無視できないし（この点で、クローン人間は一卵性双生児ほど似ていない）、そもそもある個体の表現型は多数の関与遺伝子からなる遺伝子群（システム）と個体によって異なる環境因子群（システム）との複雑な相互作用の結果なのである。

次のような主張を検討してみよう。「（ヒト・クローン問題への一般の過剰反応に見られるように）そっくり人間の存在が人格の尊厳に反するとすると、双子の人格の尊厳が侵害されることになるし（されやすい）、仮にそっくり人間が誕生した場合、その人間の人格の尊厳侵害になる（なりやすい）」この主張は、「命題Aを立てると命題B・Cという不都合な結論が導かれるので、命題Aは立てるべきではない」という結果都合主義に淫しているが、今はこの点は棚上げし、まず次の点を確認しておきたい。①状況・脈絡の如何によっては、どんなに似ている人間どうしであっても、われわれは両者を区別してかわるし（区別しづらければ区別しやすくなるような差異化を人為的に図る）、またどんなに異質な人間どうしであっても同じカテゴリーの一員として無差別的に扱う（扱わざるを得ない）。②社会現象・関係においては、同質化・均質化がある段階を越えると、それまで問題にならなかったような「微差」が意味を持つようになる。均質化が一方向的に進むのではなく、そのなかでまた差異化現象が起きるのだ。③そっくり個人A・B、第三者のCがいたとしよう。この三人がお互いをどのように見なし、お互いにどのようにかわるか、その際に同質・異質や同一・差異がどのような意味をもつか、それは最終的には、三者相互の人間・社会関係の基本的性格に左右される。親密な／見知らぬ他者の関係、対等な／非対称的な関係、友好的な／敵対的な集団の一員としての関係などの違いによって、均質性・同一性や異質性・差異性が重大な意味や価値をもったりもたなかったりする。また、いかなる形質・能力に関して同一や差異を問題にするのか、その際いかなる指標を選択するのかなども、最終的には、相互関係の基本性格に依存する。以上の点を視野に入れただけでも、上の主張がいかに具体的な条件や関係を見無視した抽象的思考に流れているか、容易にわかるであろう。

仮に、一刻一刻、まったく同じように考え同じように振舞う完全そっくり個人A・Bが存在したとしても、AとBは(a)お互いを、自分とは異なる独自の存在（精神レベルでは自己同一性の主体）と見なしてかわり、(b)自分自身を、相手とは異なる独自の存在（アイデンティティ主体）

と見なして振る舞う。この点で長期にわたり不具合が生じると、AとBの存続に危機が訪れる。AとBが瞬間、相手と自分の自己同一性を錯認してしまったとしても論理的には問題はないかもしれないが、身体・神経システム内部の次元ではそれはありえないし、周囲環境や第三者関係もそれを許さない。ここから、何がいえるか。α) 完全そっくり個人の自己同一性は、個人が個人として存続する限り、同質性・異質性の有無・程度にかかわらず成立する。β) 上の結論(a)(b)は前提の「まったく同じように考え同じように振舞う完全そっくり個人A・Bの存在」と矛盾する。つまり、前提が不条理なのだ。そうした個人は、個別的で具体的な環境・状況・他者関係が消し去られた抽象空間に浮遊する存在、すなわち現実的な生身の個人存在の最低条件も満たしていない妄念の対象としての個人なのだ。

【5】二重性複合としての個性

現代社会では、個人の意味や価値が問題になる場合、＜自律・自立⇔他律・依存（相互扶助・共存）＜理性⇔非理性（感性、情念、身体性）＞などの対抗軸と並んで、＜共通性・抽象性・均質性・同等性＞と＜独自性・特殊性・異質性・差異性＞という契機が拮抗・補完しあう。そして脈絡、状況、問題、立場などに応じて、それぞれの契機に対する正負の価値付けが逆転したり、あるいは両契機とも不可欠の価値として併用される。個性規定はこの二重契機の緊張・補填関係として成立しているのだ。

「そっくり人間の人格の尊厳」云々の問題においても、いわば縦軸での「遺伝子中心主義」・「遺伝子還元主義」と横軸における近代思想・倫理で前提とされてきた人格・人間・個人概念とが現代的難問に直面するときを示す問題性、危うさ、欺瞞性、脆弱さ、両義性、背理性が露呈しているのではないだろうか。例えばクローン人間製作に反対する論拠に「クローン人間は偏見あるいは好奇の眼差しで見られ、社会的に差別されるから」というのがある。では偏見や差別がなければクローン人間製作は許されるのかという疑義は棚上げするとしても、この言説では、可視化された同等性・同一性に対する好奇心や嗜癖、異様なまでの特異視、それに伴うある種の安らぎと嫌悪感との両価感情、さらに差異消滅に対する不気味さや不安の感情などが縋り交ぜになった主観的反応の在り方そのものの、いわんやその主観の根底にある人間観や個人観そのものはなんら批判的に吟味されることなく等閑に付されている。

この種の議論で大切なことは、「遺伝子中心主義」の問題性を指摘すると同時に、近代的な人格・人間・個人概念を批判的に相対化し（相対化は必ずしも全面否定を意味しない）、再編成することではないだろうか。（なお、「遺伝子中心主義」の思想的背景を追跡していけば、結局は、この近代的人間観・個人観の問題に行き着くことになるだろう。）この近代的個人概念の批判的再編という作業で回避できないのが個の＜本質（規定）＞と＜存在＞をめぐる思想史的議論であることは言うまでもない。個性規定を同等性に求めるのか差異性に求めるのかという対立軸は、個性の内実は個性的本質という性質規定にあると考える個性性論の枠組みのなかで設定されたものであり、その相対化のために、この性質規定を志向する枠組みそのものに対峙する存在論的個性性論が注視されるからである。

しかし、＜存在＞概念は「～がある」という、性質規定と同類の規定性に変質しやすい。存在性の概念化には常に多大な困難がつきまとい、それを概念によって掴まえようとする瞬間、手の隙間から零れ落ちていくように見える。それでもあえて場所的占有性、時間的一回性として特徴づけたり、あるいは「全き」「純然たる」「直接的」と形容詞や副詞の呪力に訴えても、存在の観念は生氣と豊饒と明晰判明を失い貧相で曖昧な内容に崩れ落ちていく。結局、個性概念は性質規

定と存在規定に引き裂かれ、いずれかに帰すものとして捉えられることになる。存在把握が多少なりとも確定的・明示的に成立するのは、例えば否定神学や中観思想などが示唆するように、個性の性質規定的把握を不断に否定する（＝実体化された規定の相対化）という間接的・消極的手続きによるときのみであり、直接的・積極的な明示的存在把握は常に性質規定を前提にし、その依存から脱しえない観がある。（存在論的個性性論に替えて生の哲学的個性性論を立てたとしても、旧来の生の哲学の枠内に留まる限り同様の、あるいはいくつかの点でより大きな困難が付きまとうが、それについては割愛せざるを得ない。）個性＝個性とはやはり、本質規定という側面と存在という側面との二重性として暫定的に仮設しておくのが、少なくとも当座は賢明なのであろうか。おそらく個性＝個性とは、相反する契機の緊張を帯びた流動的で不安定な二重性、それも幾種類もの二重性が綾なす錯体としてしか捕捉されないものなのであろう。

〔参考文献〕

- ・池田光義（1988）「G. ジンメルにおける個人主義思想の諸形態をめぐって」『一橋論叢』第100巻第1号。
- ・———（1990）「G. ジンメルにおける古典ローマ的個人主義とゲルマン的個人主義の問題」『ソシオロジ』第35巻2号。
- ・『現代思想』（1998）「遺伝子操作」特集号（9月号）。
- ・小林道雄（2004）『「個性」なんかいない！ 子供たちを自立させる処方箋』、講談社＋α新書。
- ・土井隆義（2009）『キャラ化する される子供たち 排除社会における新たな人間像』、岩波ブックレット。
- ・ブーバー、M.（1979）（植田重雄訳）『我と汝・対話』、岩波文庫。